# 急　越前の甲冑師たち、その軌跡

初代福井藩主結城秀康とともに、結城（現・茨城県結城市）から越前へやってきたとされる越前明珍のほか、越前豊原を拠点に特徴的な兜鉢を製作した馬免（面）派、近江国から越前に移住し、優れた甲冑のほか日光東照宮の金物制作もてがけた長曽祢派など、越前では複数の甲冑師の集団が活躍しました。彼らはまた江戸時代という、戦がなくなり甲冑の需要が激減したいわば「冬の時代」に、甲冑の技をもとに、自在置物のほか、馬具や刀剣の鐔といった多様な金属工芸を生み出しました。その優品は今でも親しまれています。たくましく時代を生きた福井のものづくりの先人たちの精華を見ていきましょう。

◀紺糸威桶側鋲打鉄五枚胴具足
胴裏銘　越前国住/長曽祢/藤次郎/光正作
元和八年壬戌三月吉日
（展示資料38　井伊美術館寄託）

長曽祢鍛冶は近江国を出自とする鍛冶集団で、江戸時代初期に越前に移住してきたとされている。この具足は福井藩重臣で初代藩主秀康から４代にわたって仕えた本多富正所用と伝わるもので、元和８年（1622）の紀年銘がある。

寛永年間ころ、江戸に出て刀工として歴史に名を遺した「虎徹」こと長曽祢興里も、この福井の長曽祢鍛冶に属していた、もと甲冑師であった。

この具足の作者、長曽祢光正は福井に移住した長曽祢鍛冶の第一世代と考えられる。

▲紺糸威鋲打鉄五枚胴具足のうち　鉄錆地六十五間筋兜
鉢裏銘　越前豊原住馬免朝次作（展示資料39　井伊美術館寄託）
馬免（面）派は越前国豊原（現・坂井市丸岡町豊原）を本拠とした鍛冶集団で、上写真のような後頭部がせり上がった特徴的な「後勝山形」の筋兜を制作したことで知られている。作者の馬免朝次は江戸時代初期の馬免派の鍛冶。

◀舞鶴図透鐔
銘　越前住明珍吉久作（展示資料59　個人蔵）
魚鱗具足や自在置物を制作した明珍小左衛門吉久の家は、歴代にわたって鐔も多数制作しており、特に６代目の小左衛門吉久は「よだれ小左衛門」のあだ名をとった名人だった。左はその６代目作と思われる、精緻な彫りの一品。

▲轡　銘　越前住/明珍吉嗣作（展示資料40　個人蔵）
轡は馬具の一種で、馬の口に食ませて手綱を付け、馬を操作するための金具。作者の明珍吉嗣については詳細不明。ただし福井藩の記録によると、江戸時代後半には甲冑師・鐔工として知られる明珍小左衛門家とは別に、明珍勘左衛門家という轡工の家が存在していた。

同時開催中の展示（あわせてご覧ください）

企画展　**城下町福井と九十九橋**

１階　松平家史料展示室　令和６年１０月１９日（土）～１２月８日（日）

展示解説シートNo.172　令和6年10月19日発行
福井市立郷土歴史博物館
福井市宝永3-12-1　電話 0776－21－0489
Fax 0776－21－1489
担当：松村 知也
印刷：株式会社宮本印刷



令和6年秋季特別展

# 鉄の名工　越前明珍

●会　場　２階 企画展示室
●会　期　令和6年10月19日（土）～12月1日（日）

江戸時代の福井城下で活躍した鍛冶、明珍吉久。代々小左衛門吉久を名乗り、甲冑・自在置物・鉄鐔など、鍛鉄とその加工技術を巧みに用いた名作を遺しています。「越前明珍」とも呼ばれ、好事家にはよく知られた存在である一方、鐔以外では在銘の作品も少ないことから、その実態は謎に包まれています。越前明珍の名品筆頭にあげられる「魚鱗具足」（越前松平家伝来）も、その独創性ゆえに技術系譜を追うことが困難な「謎多き名品」です。

本展では、その越前明珍をはじめ諸国の工人が手がけた「自在置物」、また魚鱗札を用いた「魚鱗の具足」、さらに明珍ほか未だあまり名を知られぬ越前の鍛冶の作品の数々などを一堂に集め、江戸時代の金属加工技術の粋と、その中で確かな位置を占めた越前明珍の軌跡を追います。

## 序　謎多き魚鱗の具足

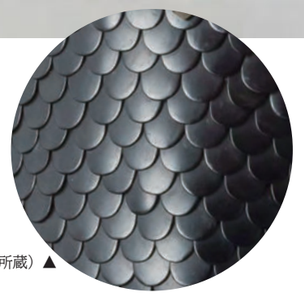
越前松平家伝来の名品として現在に伝わる「魚鱗具足」。胴や袖が魚の鱗のような「魚鱗札」で構成されていることからこの名があります。

「魚鱗札」で構成される甲冑は、この魚鱗具足のほか、江戸時代のものとされる例が全国に散見されます。練革を使用した魚鱗札で構成するものには「船手具足」と呼ばれるものもあり、具足（甲冑）を着たまま水中に入っても浮力を得て水に浮かびやすいという特性をもった、実用重視の具足として知られています。その他の鱗札を用いた「魚鱗の具足」も、そのすべてが「家地」と呼ばれる生地に札を縫い付けて構成されており、西洋の「スケイルアーマー」をモデルとしたのではと考えられる構造をもっています。

一方、越前松平家伝来の魚鱗具足は、鍛えた鉄を加工し、鎬筋（魚鱗札の中央に見られる稜線）をつけた、精美で規格性の高い鱗札同士を鋲で連結し、一部は伸縮までできるよう工夫された極めて入念な作で、その構造は国内の同時代のどの具足とも類似性が乏しい「謎多き」作品です。

福井藩お抱えの甲冑師・明珍小左衛門吉久の手になると伝わるこの不思議な「魚鱗具足」について、まずは詳しく見ていきましょう。

▲魚鱗具足（展示資料１　越葵文庫　当館保管）



魚鱗胴畳具足（展示資料３　真田宝物館所蔵）▲

# 破　明珍派と鉄の芸術「自在置物」

「自在置物」とは、江戸時代の甲冑師、明珍派によって生み出された鉄の工芸品で、龍や鯱といった架空の動物から鯉・海老・鳥類・昆虫に至るまでの様々な生物を、鉄の部品を鋲や蝶番などにより巧みに組み合わせ、実物同様の動きをまさに「自在」に再現できるようにした造形物です。

「自在置物」と一般に呼ばれるようになったのは実はごく最近のことであり、江戸時代当時にはどんな呼称が一般的であったのかはよく分かっていません。ただ越前松平家では「文鎮」と呼ばれていたことが明らかです。文鎮といっても、実用の文具としてではなく、江戸の藩邸などで賓客をもてなす際の座敷飾りとして、「見せる文具」として人々の目を楽しませたことが記録からうかがえます。

戦がなくなった平和な時代、本来戦いの道具である甲冑の制作を生業としていた甲冑師たちは、自らの技術を発揮する新しい分野として、このような鉄の芸術を生み出したのでしょう。

魚鱗具足を生み出した福井の甲冑師で代々「小左衛門吉久」を名乗った越前明珍の作とされる自在置物も、越前松平家伝来のものをはじめとして複数伝存しており、その技術の高さを今に伝えています。

近代になってこれらの作品はあらためて国内外から評価を受け、松平家伝来の龍の自在置物も明治天皇の目に留まり、高く評価されたことが知られています。

また新しい時代の自在置物の担い手たちは、鉄だけではなく銅や銀といった材料も駆使したより発展的で写実を極めた作品も生み出しました。現代でもこれらの技術を受け継ぐ気鋭の作家たちが活躍しています。

▲**自在龍置物**　伝明珍吉久作（展示資料５　越葵文庫　当館保管）

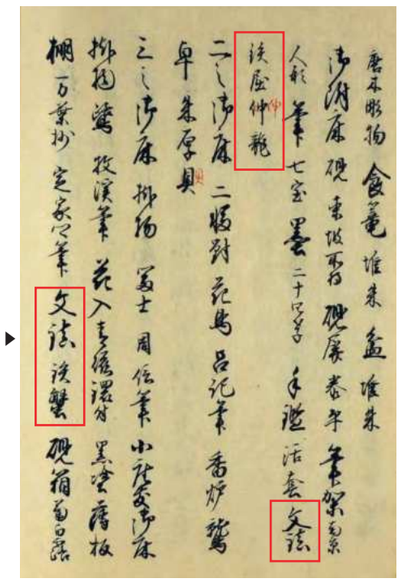
無銘だが福井藩の甲冑師、明珍小左衛門吉久の作と伝わる龍の自在置物。２代目小左衛門吉久の作との伝もあるが、魚鱗具足が制作された元禄年間（1688～1704）に活躍した４代目の作である可能性が高い。保存状態も良く、現存する自在置物の中でも優品といえる。

首の一部を除く、尾までの胴体全体、四肢の関節、爪、顎の各関節を、可動幅の差はあるものの、任意に動かすことができる。関節を目一杯動かすと、右写真のようなポーズを取らせることもできる。

◀**自在龍置物**（展示資料９　越葵文庫　当館保管）
**附属木箱の貼り紙**

越前松平家伝来の小型の龍の自在置物が収納されている木箱に貼られた表示。「明珍吉久作　古鉄龍小文鎮」とあり、越前松平家においてはこれらの自在置物が「文鎮」と呼ばれていたことをうかがわせる。

**『国事叢記』巻十三　宝暦十二年九月二日条**
（展示資料６　松平文庫　福井県文書館保管）▶



福井藩で編纂された編年体形式の歴史書『国事叢記』には、自在置物が賓客の饗応にかかる座敷飾りの調度として用いられたと思われる記述が多数見られる。右は宝暦１２年（1762）９月２日の記述で、江戸の福井藩邸で幕府老中らを招いた宴席で、座敷飾りとして「文鎮　鉄屈伸龍」「文鎮　鉄蟹」の文字が見える。

室礼の調度として掛物（掛軸）や立花のほか、筆架・筆・硯・硯箱・色紙といった文具とともに「文鎮」があり、文鎮としての実用性はともかく、文具の体裁をとって配置されていたことが分かる。

▲**自在龍置物**　明珍宗察作（展示資料18　東京国立博物館所蔵）Image:TNM Image Archives

銘に「正徳三癸巳歳六月吉辰/明珍紀宗察/行年三十一暦/於武江神田作之」とある。正徳３年（1713）の紀年銘は現存で在銘の自在置物の中では最古。ただし可動部位の豊富さや造形の美しさは美術品として完成の域にあるように思われる。

全長135cmと大型で、その分構成する部品の数も多い。胴体・四肢（足首を含む）・爪・顎に加え、耳も若干動かすことができる。

作者の明珍宗察は江戸の明珍宗家、明珍宗介に師事し、秘伝を伝授されたという名工で、安芸広島藩のお抱え工となった。越前松平家にも彼とその子息・明珍宗寅の合作による具足が伝来していた（展示資料16）。

**自在伊勢海老置物**　明珍宗清作
（展示資料25　東京国立博物館所蔵）▶
Image:TNM Image Archives

「明珍宗清」の銘がある。触角・眼球・脚・胴体・尾びれの各部位を動かすことができ、実物の伊勢海老のように胴から尾部を完全に腰折れさせたポーズもとらせることができる。頭背部の棘状の突起の一つ一つから脚の関節の複雑な形状まで、着色されていれば実物と見まがうほど写実に徹した作品。ふつうに置いてあれば見えない腹部の節など細かい表現にも全く手を抜いていない。江戸後期～幕末期の作と考えられる。江戸時代の自在置物の中でも有数の優品といえる。

作者の明珍宗清については詳細は不明だが、写実にこだわる作風から、江戸時代でも幕末に近い時期の作品と思われる。

▲**自在鷹置物**　明珍清春作（展示資料27　東京国立博物館所蔵）Image:TNM Image Archives

止まり木に止まっている鷹をかたどった自在置物。「明珍清春」の銘がある。作者の明珍清春については詳細は明らかでないが、江戸時代後期の作と思われる。彼の作品としてはほかに大英博物館や台湾の宗培安コレクションに精巧な龍の自在置物が見られる。

両翼をたたんだ状態と広げた状態を両方とらせることができる。その他尾羽の開閉、脚の爪の関節の各部位、さらに頭部も左右に動かすことができる。羽毛や脚部の皺なども毛彫りで丁寧に表現されている。止まり木の唐草文様の銀象嵌も緻密で美しい。

鷹は中世以降、「鷹狩」に用いられ、武家にとって重要な意味を持つ動物であり、武家の調度としてもふさわしいものと言えるだろう。

**自在蝶置物**　宗義作（銀製）
（展示資料32
清水三年坂美術館所蔵）▶

◀**自在蜂置物**
宗好作（素銅製）
（展示資料35
清水三年坂美術館所蔵）

**自在蜂置物**　宗好作
（展示資料35
清水三年坂美術館所蔵）▶

蝶やカマキリなど、昆虫をかたどった自在置物は江戸時代から見られるが、近代に入るとより写実にこだわり、昆虫特有の細かい関節などを忠実に再現し、材料も鉄のみならず銀や銅などさまざまな材質を駆使して作られるようになる。これらの多くを担ったのが金工の冨木一門であり、その系譜を継ぐ作家が現在も活躍している。